

グローバル化社会に向けた生涯教育 -大学教育の国際化との連携-

大橋 眞
斉藤隆仁
(徳島大学)

【要旨】

グローバル化の時代を迎えて、これに関連する様々な課題に対応出来る人材育成が課題となっている。これに関わる自発的な生涯学習の仕組みを、大学教育の国際化との関わりで提供することの意義に関して、徳島大学の教養教育の実践事例を通して検討を行った。今回の研究により、立場の異なった他者との対話による世代を越えた学び合いが、グローバル化社会の諸問題に関わる生涯学習のモチベーションとなり得ることがわかった。学生は、世代を越えた視点の違いから、新しい気づきにつながることがある反面、他人の意見を鵜呑みにしやすいという問題もある。自発的な生涯学習の仕組みを、学生の課外活動に連携させるなど、多くの活動とのネットワーク化により、さらに充実を図っていくことが、今後の課題である

1. 研究の背景と目的

グローバル化という現象が、地域社会のあり方を見直す動きに繋がって来ている¹⁾。そのために、グローバル化社会に向けた対応として、新しい地域社会の人的資本力²⁾の創生が必要であり、それに関連した生涯教育の充実が望まれる。また、大学においてもグローバル化社会への対応は、大学教育改革の大きな課題である³⁻⁵⁾。海外から日本の大学に留学する学生を増やすことや、日本から海外に留学する学生数を増やすだけではなく、グローバル化社会の課題に対応できる人材育成に向けた取組を推進することが求められている。その一方で少子高齢化の問題は、人口構成のバランスの観点から、将来の現役世代の負担増が社会に与える影響が深刻な問題として懸念されているが、失われつつある知の継承の仕組みを再構築して、知の循環型社会を維持することに対する意義を考え直す必要がある。それらの課題に対応するためには、グローバルな視点から持続可能な社会を実現するための生涯学習社会の充実が課題であろう。

グローバル化社会における生涯学習の充実に関連して、多文化共生のための生涯学習の取組を挙げることができる。これまでの一般的な生涯学習に関する捉え方よりも、より幅広い範囲で捉え直すことにより、生涯学習者同士の連携のネットワーク化の推進と共に、多文化共生のための学びの場が拡大することにつながっていくと考えられる。それに関する生涯学習の考え方として、『大人だけではなく子供を含めて「常に学び続ける存在」としての人間が、他者あるいは事物との関係において、「自身の存在意義」つまり居場所を見つけようとする行為であるとする考え方⁶⁾』は、生涯学習の発展という観点から見ると注目に値する考え方である。これによって、生涯学習は、生涯教育の場だけ

ではなく、地域社会全体に広がる人間同士の関係や、人と関わる事物との関係性を見直す行為など、多岐にわたって包含することが可能になる。住民が参画して地域づくりを行う取り組みが数多く見られるようになってきた。このような活動に関わること自体が生涯学習であり、このような活動を推進することは、多数の人に対して生涯学習の場を提供することに貢献しうる活動であると考えられることもできる。また、住民主導の市民大学の事例⁷⁾なども生涯学習の場自体を住民自体が能動的に開発する事例と言えよう。

一方、大学や大学院の社会への開放は、生涯教育の機関としての大学の役割を明確化するものであり、体系化された生涯学習の一環を担うものとして、大学や大学院の果たす役割を位置づけることに繋がる。多文化が共存する社会は、創造的な社会を築く上で有利な条件であるという考え方に基づく積極的な政策をすすめる地域や国も多くなっている⁸⁾。大学においては、多文化共存はグローバル化社会に対応できる人材育成に欠かせないものであるという考え方が一般化している。単なる共存状態から、お互いに刺激し合いながらより良い学びを作り出すような共生関係を築く必要がある。これからの社会において重要な概念と考えられている持続可能な社会を構築するためには、社会現象を歴史的な観点から検証するだけではなく、将来にわたっての動態予測ができる能力を身につけることが不可欠である⁹⁾。そのためには、発達段階の早期から他者との関わりの中で、多様な視点を身につけること¹⁰⁾が重要であり、大学教育の中でも世代や地域を越えた人との対話の場を積極的に導入することが必要であろう。このような取組がさらに発展すれば、グローバルな視点から持続可能な社会を考えることができる能力の涵養につながることが期待されよう。

本研究は、世代や地域を超えた他者との対話から学ぶ取組を通じて得られた成果に基づき、このような他者との対話が、グローバル化社会の課題に関する生涯学習の動機付けとして有効に働きうるということを事例的に明らかにすることを目的としている。また、対話を通しての生涯学習が、大学や地域社会の知的基盤形成への学習者自身の貢献を感じるにより、次の学習のさらなる動機付けになりうることを示して行きたい。同僚的対話を通じたアクティブラーニングの導入が大学教育の中で進みつつある^{11,12)}。対話を通じて、学生の授業での積極的な関わりを求めて、活動的な学びの姿勢を引き出そうという試みである。しかしながら、これまでのところ、世代を越えた対話を日常の授業で導入する取り組みはそれほど多くはない。グローバル化社会が、地域社会のあり方に影響を及ぼすことや、これに対応できるための地域社会の知的基盤の充実が課題であることなど、大学教育改革における地域社会を巻き込んだ取り組みが、グローバル化社会に対応した次世代の人材育成に重要な役割を果たすと考えられる。本稿では、大学のグローバル化に対応する人材育成には、地域社会人との生涯学習と一体化した取組が有効であることについて、論じていきたいと考える。

2. 研究方法

(1) 取組について

1) 地域社会人との学習グループを基本とした授業

徳島大学では、人間力育成のための教養教育として、平成 20 年度より大学教育に関心の高い地域社会人が、大学生とグループをつくり、社会の課題をテーマとした議論を

することから新しい気づきを起こさせることを目的とした授業群（共創型学習科目）が開講された¹³⁾。地域社会人の募集は、大学の公開講座のパンフレットに掲載して行った。毎年約 30 名の地域社会人が、これらの授業に参加している。授業においては、扱うテーマは授業ごとに異なっているが、講義室で地域社会人と学生がグループを作り、ある社会的なテーマに関する議論を行う過程において、他の学習者からお互いに学び合うというスタイルを基本としている。

2) 地域社会人が参加するグローバル化に関する授業

グローバル化社会をテーマとした共創型学習科目では、いずれも地域社会人と学生が同じグループにおいて、議論をすることを基本とした。多人数の授業（受講生 50 名程度）では、社会人がグループ毎に 1 人（学生 3-7 人と地域社会人 1 人）という単位で複数グループを形成して、議論をおこなった。また、受講生が 10 人以下の授業では、地域社会人が複数人（学生 5-10 名と地域社会人 2-5 名）で構成されるグループを形成しておこなった。一般学生向けのシラバスには、社会人との議論を行う旨を記載して、社会人との議論に対するモチベーションを持った学生の参加を促した。また社会人募集のパンフレットには、学生との後の他に、「大学で学ぶことの意義を考える」という記載を入れるなどの工夫を取り入れて、大学教育に関心のある地域社会人を集めることを目指した。

平成 23 年度の「授業科目」とテーマはつぎのようである（括弧内の受講生は、現役学生の受講生数を示す）。

「グローバル化社会に向けて」（社会人 6-9 名、学生 40-50 名、15 回実施）

どうする原子力発電

TPP は何を変えるのか

グローバル化社会と農業

グローバル化社会と国際協力

「グローバル化社会を考える」（社会人 5-7 名、学生 7-12 名、15 回実施）

グローバル化と人口問題

福祉制度を考える

英語教育の課題

格差社会

3) 地域社会人が関わるグローバル化社会に向けた課外学習

今回の取組においては、地域社会人が留学生と共に学ぶ「留学生と学ぶ英会話初級」を開講し、これに課外学習として学生が参加する場を設けた（図 1）。また、インターネットのビデオ会議システムにより、地域社会人が、海外の大学生と日本語や英語を用いて、テーマに沿って会話をおこなう取り組みに、学生が授業の課外学習として参加する「海外の大学生との日本語スカイプ交流」及び「海外英語交流」（図 2）を設定した。

「留学生と学ぶ英会話初級」（社会人 5-7 名、学生 4-6 名 7 回実施）

「海外の大学生との日本語スカイプ交流」（社会人 2-8 名、学生 2-5 名 15 回実施）

「海外英語交流」（社会人 6-8 名、学生 3 名、8 回実施）

(2) 聞き取り調査と課題レポートの分析

社会人に対する聞き取り調査は、上記の授業のいずれかに 13 回以上参加した地域社会人 8 名（50 代 1 名、60 代 6 名、70 歳代 1 名）を対象として、すべての授業が終わった後に行った。50 歳代以外の社会人は、1 名を除き定年退職者である。現役時代の職業としては、医療系、技術系などの分野に関わった人で占められていたことが特色で挙げられる。聞き取り調査の項目は、「この授業を履修することになった動機」、「大学生に伝えるということに関する意義」、「大学生と共に学ぶことにより見えてきた大学生の姿」である。また、学生（「グローバル化社会に向けて」受講生 48 名、「グローバル化社会を考える」受講生 10 名）に対しては、毎回の授業の後に「この授業で学んだこと」というテーマで、400 字の小レポートの提出を求めた。毎回のレポートの中から、視点の置き方や気づきに関連した記載のあるものから、該当する部分を抽出した。全体の 1/4 のレポートに社会人との意義を感じたという記載が見られた。

3. 取組の結果

(1) グローバル化社会をテーマとした教養教育

このようなグループディスカッションでは、積極的に関わろうとする学生がグループ内に複数名いるような場合には、社会人との対話が発展して、グループでの議論が活発に行われた。このような形になると、社会人にとっても学生の発言が刺激になって、テーマに関する予備学習の必要に迫られるなど、生涯学習に対するモチベーションとなることがわかった。学生にとっても、社会人と対等に議論する同年代の学生から受ける刺激は、議論のテーマに関する予習に対するモチベーションを誘導しうる。ここでは、社会人は多様な物事の考え方を、学生たちに提示する役割を果たしうる。このようにして、社会人の国際的な感覚が、学生の議論の方向性を決定づけるような要素となる傾向が強く、社会人のこれまでの勉学における背景が重要な要素となっていることがうかがわれる。

また、地域社会人の役割が、学生の発言を誘導するための牽引役になることもある。この役割を果たせる社会人には、国際感覚だけではなく、学生との対話における自らの役割に対する理解が必要になるために、初等中等教育やその他の教育活動などに、何らかの形で携わってきた経験者に多い。また、国際交流などにボランティアとして携わってきた社会人も、それまでの経験から学生から意見を引き出す形を取り入れながら、対話に望むことが出来る場合が多い。このようにして、地域社会人は国際的な感覚を活かす場が授業の中では多く、このようなバックグラウンドをさらに伸ばすための生涯学習に対するモチベーションを高める効果を持っている。またこのような授業で活躍しうる社会人は、学生と共に学ぶパートナーとして、一定の影響をもった存在になり得よう。大学教育の場における世代を越えての知の伝達型社会の構築に対する貢献は、自己発展型の生涯学習のモチベーションとしてふさわしい形の一つであると考えられる。

表 1 社会人参加のグローバル化に関する授業の受講生の感想（括弧内著者挿入）

- 今回のディスカッションを通して「グローバル化」という言葉について、私の認識がガラッと変わった。今日のグローバル化（社会）は、大体の人が（今よりもさらに）グローバル化（を推進）すべきであると思っていると思う。私もその 1 人であった。しかし、社会人の〇〇さんの考え方は全く違った。〇〇さんの考えではグローバル化は非常に差別的であるそう。それには心当たりがあった。日本もグローバル化するべく開国した時もアメリカから不当な条約を押し付けられ、地球規模でグローバル化しつつあるこの社会で資源があまりなく、協定を結ぶのに不利なアフリカはより貧困になるのではないか。（「グローバル化社会に向けて」受講生・機械工学科）
- 今回のテーマは「グローバル化」についてで、最近よくグローバル化が急速に進んでいるということをテレビやネットで見かけたりすることが多かったが実際「グローバル化とは何か？」と言われると上手く答えることができなかった。学生たちの意見は海外旅行、文化の交流、貿易といったことがほとんどだった。しかし、社会人の方は「グローバル化とは、global＝地球全体の、つまり地球全体が共通の目的をもつことなのでは？」という意見を出した。確かに学生たちの意見もグローバル化ではあるがそれはその一面でしかない。私は社会人の方に言われて初めて物事を広い視野で見ることができていないことに気付いた。（「グローバル化社会に向けて」受講生・機械工学科）
- グローバル化によって個々の特徴が薄れていくことの善し悪しについては未だによくわからないが、それを大切にしている人たちがいるということは理解できた。TPP については反対が多数派だったと思う。人件費や環境由来のマイナス面が明らかにあるためこの話題はわかりやすかった。政治的な問題もはらんであるのではないかという意見には目から鱗が落ちる思いがした。また英語に関しては社会人の方のあくまで道具として使うべきであるというような内容の言葉が心に残った。（「グローバル化社会に向けて」受講生・知能情報工学科）
- 私は、人から学ぶことに対する大前提として、あらかじめ自分で考えることが大切だと思います。自分の考えを持つことで相手の考えと見比べることができるし、相手の意見を聞くことで自分の視野を広げることもできるからです。それは、知識や教養に限らず、自分の価値観を豊かにしてくれると私は思いました。（「グローバル化社会を考える」受講生・人間文化学科）
- 話し合いの内容については、身近なグローバル化や TPP、南北問題といった議題が出ましたが、まずはじめに、言葉の定義をすべき、という社会人のご指摘があり、「グローバル化」の定義について話し合いました。今まで意識してきませんでした、同じ言葉でも相手が自分と同じ意味で用いているとは限らないため、言葉の定義を逐一確認する必要があるということ学びました。（「グローバル化社会に向けて」受講生・医学科）



図1 大学生の自主活動と連携した英会話に関する生涯学習



図2 モンゴル人留学生と日本人学生のペアが運営するインターネット
トビデオ会議システムを用いたモンゴルの大学と「海外英語交流」

(2) グローバル化をテーマとした学習における社会人の役割

本取組に参加した地域社会人は、全員この取組に対して、肯定的な意見を持っていた。「この授業を履修することになった動機」として、一般的な生涯教育の場では、同世代の人だけで学ぶことには、面白みがないという人がいた反面、一般的な生涯教育の講座にも積極的に参加している社会人も4名いた。また、一般的な講座には、あまり積極的に参加していない社会人は2名であった。「大学生に伝えるということに関する意義」に関しては、4名は肯定的な意見であったが、3名はその意義に対して自信を持って答えることに対して懐疑的であった。「大学生と共に学ぶことにより見えてきた大学生の姿」としては、現代の大学生のコミュニケーション力を肯定的に捉える社会人が大多数であったのに対して、「議論の背景となる知識の不足」を指摘する声もあった。また、この取組に参加することになったきっかけとして、「大学の社会人向け講座のパンフレットを見て」という

社会人がほとんどであったが、知人の紹介という人も1名いた。

聞き取り調査の結果から、今回の取組に参加した社会人は、一般的な社会人向けの生涯教育の受講生とは、若干異なった受講生層がこの授業に参加していることがうかがわれる。これらの社会人は取組に参加していくなかで、学生と積極的に関わることに對して、自身の生涯学習としての意義を見出す社会人層がある反面、学生と積極的に関わることに對して、十分に自信を持ちきれない状態であるケースも存在した。グローバル化に関する議論では、自身の現役時代の仕事と何らかの関連により、グローバル化社会の問題点について勉強した経験のある社会人は、授業の中でも積極的に発言することが多い反面、そのような経験の少ない社会人は、学生の意見の聞き役をするなど役割分担がうまくいくケースも存在した。しかし、積極的な発言と共に、相手方の意見の受け止めに十分に出来ない場合には、意見のすれ違いや、学生の意見の羅列状態から、意見の取りまとめという方向への力学が働きにくいために、消化不良のままに議論が終わってしまうケースも存在した。このような状態を避けるためには、社会人同士が、あらかじめ授業のテーマに沿って、予備学習をする場が出来ることが望ましいと考えられる。

(3) 取組の結果から明らかになったこと

今回の取組の結果から、大学の教室という場において世代を越えた対話型学習グループを形成することにより、大学教育と融合した形の能動的な生涯学習モデルを構築できることがわかった。また、この融合モデルは、世代を越えた人同士の対話にグローバル化社会へ対応できる人材育成という目標を設定することにより、グローバル化社会の課題に関する勉学のモチベーションの高揚にもつながることがわかった。今回の取組に参加した社会人は、次世代の育成に関わることを自らの生涯学習の目標とする人も多いが、一部は住民主体の地域づくりという主体的な活動に関わる生涯学習者と重なるところもある。

さらに、グループでの議論に参加した社会人の意見に対して、積極的に議論をする学生は割合としては決して多くはないが、社会人の意見に対して何らかの刺激を受ける学生が多い。ただし、社会人の意見を自分の頭の中で捉え直すよりも、そのまま受け入れるという傾向があることがわかった。そのために、社会人の事前学習や社会人グループとしての学習会の開催などの対策が必要であろう。社会人の学習グループに、自主的に学生が入って行くためには、課外学習などを通じた人間関係の構築なども欠かすことができないと思われる。生涯学習者である社会人の側から、このような取組に対する課題とその解決策について、自主的な提案が出来るような環境を整備していくことが、今後の課題である。

4. 自立した地域社会に貢献につながる生涯学習

(1) 次世代の育成を目指した生涯学習の展開

グローバル化社会の時代を迎えて、地域社会の自立が課題となって来ている。そのために、本格的なグローバル化社会となることが予測される次世代の人材育成につながる生涯学習の仕組みを構築することが、これからの地域社会の課題であろう。これまでの生涯教育は、自己実現の要素が多く、大学教育の体系の中で位置づけることが難しい面

があったと思われる。そのために、これまでは生涯教育は大学教育とは切り離された形で行われることが一般的であった。また、教育の内容も一般人に理解しやすいように、大学教育の入門的な内容となっていることが多かった。

今回の取組は、このような生涯教育の体系化を目指すのではなく、生涯学習のモチベーションを次世代の育成に関わることに置くことにより、相互の自己発展的な学びを目指すとともに、自己発展的な自主活動としての学びの輪の育成である。また、学生の側からは、新しい視点に対する気づきの場であり、多文化共生社会における学びに対する導入である。そのために、大学教育の中に、積極的に地域社会人が関わる場を作ることだけではなく、地域社会人の自主的な学びの場に学生が関わる企画や、学生の自主活動に社会人が関わる場を作る企画を課外学習のかたちで取り入れた。とりわけ、グローバル化社会への対応に関連する地域社会人の活動の例について、次に紹介したい。

(2) 大学生の課外学習との連携

大学教育として、グローバル化に対応できる人材育成が課題となっており、各大学でも様々な改革が行われている。今回の取組では、学生の課外学習の場に地域社会人が参加して、世代の異なる日本人学生と共に英会話を楽しみながら、異文化交流の機会を持つことができる機会を設けた。また、地域社会人に対して、学生と留学生の課外学習としての校外行事や、校内イベントに参加できる仕組みを作ることにより、地域社会人が世代間交流をしながら、異文化理解を深める機会を設けた。このようにして、大学教育の正課である授業の中だけでなく、これに付随した課外学習においても、グローバル化社会に対応するための人材育成の仕組みを、地域社会人と共に作ることが可能であることが明らかになってきた。今後はこのような仕組みを、次第にプログラム化して充実させていくことにより、大学教育の充実と共に、地域社会のグローバル化に対応できる人材育成のための生涯学習社会の充実につながっていくと考えられる。このように、大学教育と地域社会の連携することにより、地域社会の知の中核としての大学の役割が明確化されるとともに、地域社会の知的基盤を構築し、地域の活性化に貢献することが期待される。このような取組を通じて、地域社会の中から住民主体の活動や、公開された大学の中に、自主活動としての生涯学習の場の設定を、主体的に行うリーダーの育成に繋がれば、このような形の生涯学習の輪が、自己発展的に広がっていくと期待される。

(3) 海外の大学との連携

インターネットを用いて、海外の大学と授業連携をおこなうことや、海外の大学生と交流することは、グローバル化時代に必要な感覚を養うために、有効に働くと思われる。異文化交流に関心の高い地域社会人にとっては、刺激が多かったようである。海外の大学生と英語による交流を通じて、日常の学習の成果を試すことは、学習に対するモチベーションを与える好機となる。学生がこのような取組に関わることにより、地域社会人と日本人学生の共同作業を通じて、世代間交流と異文化交流を同時に実現しながら、同時に大学の国際化にも貢献出来る可能性がある。このようにして、形成された地域の生涯学習社会としての「ネットワーク型共同体」を、世界に広げていくことにより、世界の各地の人的資産をつなぐネットワークとしていくことが、今後の課題である。留学生

と日本人が共にひとつの目的を持った活動を行うことは、多文化共生社会実現のために有効であると考えられるために、今回の取組においては、留学生と日本人学生がペアとなって、海外の大学との連携授業を行い、相互協力の機会を設けた。

5. まとめ

グローバル化社会への対応は、大学や地域社会の重要な課題になってきている。そのために、地域との連携を推進すると共に、グローバル化に対応できる人材育成を行う仕組みをつくる必要がある。これにより、地域の大学は、知の拠点としての役割を明確化させ、次世代に向けての地域社会の知的基盤の構築につながっていくと思われる。

今回の取組は、大学と地域が協力関係を構築する仕組みの一つとして、地域社会人が大学生と共に、これからの社会のあり方を共に考える場をつくることを目指した。国際的な感覚を持ち合わせた社会人が、学生と共に学ぶことで、グローバル化に対応できる人材育成に携わると共に、自身の学びに対するモチベーションの高揚につなげる仕組みである。持続可能な社会の構築のためには、これからの社会に対する予測が欠かせない。そのためには、世代や地域、国を超えて、お互いに知恵を出し合う仕組みを、作り出すことが不可欠ではないだろうか。

引用文献

- 1) 今井 久「ソーシャルビジネスの可能性：グローバル経済からローカル経済へ」『社会科学研究』 33、 2013、 pp1-18
- 2) 平田 潤：「日本のヒューマン・キャピタル・クライシス：先進諸国の『人的資本力』問題に関するノート No. 1」(『経営政策論集』 7、 2007、 pp. 1-39)
- 3) 文部科学省、「新しい時代における教養教育のありかたについて」(『中央教育審議会答申』2002)
- 4) 文部科学省「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」(『中央教育審議会答申』2012)
- 5) 文部科学省「学士課程教育の構築について」(『中央教育審議会答申』2008)
- 6) 矢野泉『多文化共生と生涯学習』明石書店、2007、pp. 16
- 7) 瀬沼克彰『地域を活かす生涯学習』ミネルヴァ書房、2003
- 8) 牧野篤『くわたし』の再構築と社会・生涯教育グローバル化・少子高齢社会そして大学』大学教育出版、2005、pp. 324-420
- 9) 日本ホリスティック教育協会『持続可能な教育社会をつくるー環境・開発・スピリチュアリティ』せせらぎ出版、2006、pp. 12
- 10) キャロル・ギリガン『もうひとつの声ー男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店、1986
- 11) 林 徳治， 藤本 光司「大学授業におけるアクティブラーニングの教育実践(2)：共通教育科目『教養ゼミナール』を対象として」『日本情報教育学会年会論文集』 26、 2010、 pp. 186-189
- 12) 安永 悟 『活動性を高める授業づくりー共同学習のすすめ』 医学書院 2012

- 13) 大橋眞・中恵真理子・光永雅子・斎藤隆仁・廣渡修一「大学教育ボランティアを活用した教養教育 -地域に知の循環型社会の構築を目指す新しい形の生涯学習-」
(『日本生涯教育学会年報』 31、2010、pp.83-96)

注)

本稿では、つぎのように用語に関する定義をおこなう。

「グローバル化」 グローバル化の先行的役割を果たしている経済のグローバル化では、「国境や地域の境を超えて様々な取引が行われるようになること」という定義¹⁾が一般的と考えられるが、ここでは、より一般的な概念として、「地球規模でお互いの社会の様々な関係性が深まっていくこと」と定義する。

「グローバル化社会」 地球規模において、様々な局面においてお互いの関係性が深まった社会。

「グローバル人材」 グローバル化社会において活躍出来る人材。

「地域社会人」 地域社会に生活の拠点をもつ社会人。